

(3) 感銘を受けた授業

加藤がどんな授業を受けたのか、その全体は分からないが、記憶に残った何人かの授業について『羊の歌』『駒場』の章に触れる。ドイツ語講読は哲学の岩元禎に習ったが、よくわからなかった。仏教学のペツォルトのドイツ語作文の授業も学生とはすれ違いに終わった。しかし、感銘を受けた授業や教授が皆無だったわけではない。



そのひとりには片山敏彦教授だった(左写真)。片山は教材に独語版のベルクソン『形而上学序説』を用いた。そしてベルクソンとその考えを説明するのに、独仏の詩人や哲学者を引き合いに出した。片山が「星たち」と仰ぐ人たちだった。それはロマン・ロラン、シャルル・ヴィルドラック、ノヴァーリス、リルケ、ネルヴァル、オルダス・ハックスリ、そしてインドのタゴールやヴィヴェカナンダたちだった。加藤

は片山が紹介した「星たち」の世界の探検に乗り出そうと考えて、「三日に一冊、年に百冊の翻訳書を読むこと」を決心し、それを実行した。このうちの何人かについては、敗戦直後に発表された著作で論じた。

もうひとりには五味智英教授だった。五味はのちに『万葉集』研究の大家になる学者である。当時は東京帝国大学を卒業して、一高に赴任したばかりだった。五味が受け持った『万葉集』の授業に、中村真一郎、大野晋、小山弘志らとともに参加した。そして「一言一句をおろそかにせず、正確でありうる限度まで正確であろうとする態度」に感銘を受けた。五味が指導

する「万葉集輪講」にも参加した。『万葉集』は加藤が最初に読んだ古典文学である。



もうひとりには矢内原忠雄の「社会法制」という授業だった。矢内原は「議会民主主義の最後の日に、その精神を語ろうとされた」。加藤は授業を聞きながら「精神的な勇気と高貴さが何であるか」を知った。矢内原は『中央公論』に発表した軍国主義批判「国家の理想」が批判され、辞任も覚悟していただろう。そして1937(昭和12)年12月に東京帝国大学を追われるように去った。(左写真：矢内原忠雄)

感銘ではないが、衝撃を受けた知識人もいる。中村真一郎らが立ち上げた「一高国文学会」に加藤も参加し、作家横光利一を「座談会」(加藤は「講演会」と書くが)に呼んだ。横光は人



気絶頂の作家だった。ところが横光の話は、さっぱり訳が分からなかった。加藤たちと論争となり、横光を完膚なきまでに論破することとなった。その中心に加藤がいて、水際立った論を展開したという。その論争のことは、中村稔ら後輩たちにも伝わる「語り草」となった。脆弱な論理しかもたない日本の知識

人の姿に衝撃を受けたのである。それは横光個人の問題ではなく、日本浪漫派や京都学派にも共通する、と加藤は捉えた。(左写真：横光利一、30歳の頃)